

## 2020年難民関連文献一覧

### 【図書】

- 明石純一『人の国際行動は管理されるのか』第1部「秩序形成をめぐる国際的動向」ミネルヴァ書房
- 赤星聖『国内避難民問題のグローバル・ガバナンス：アクターの多様化とガバナンスの変化』有信堂高文社
- 浅田正彦・桐山孝信・徳川信治・西村智朗・樋口一彦編『現代国際法の潮流：坂元茂樹・薬師寺公夫両先生古稀記念論集2：人権、刑事、遵守・責任、武力紛争』東信堂
- アフマディ、F./石谷尚子訳『声なき叫び：「痛み」を抱えて生きるノルウェーの移民・難民女性たち』花伝社
- 五十嵐誠一・酒井啓子編『グローバル関係学7：ローカルと世界を結ぶ』岩波書店
- 池田光穂編『暴力の政治民族誌：現代マヤ先住民の経験と記憶』第7章「移民と難民」大阪大学出版会
- 和泉真澄編『日系カナダ人の移動と運動：知られざる日本人の越境生活史』小鳥遊書房
- 宇田有三『ロヒンギャ差別の深層』高文研
- 岡田千あき編著『スポーツで蒔く平和の種：紛争・難民・平和構築』第3章「難民の生活に寄り添う：シリア」大阪大学出版会
- 菊池嘉晃『北朝鮮帰国事業の研究：冷戦下の「移民的帰還」と日朝・日韓関係』明石書店
- 北村暁夫・田中ひかる編『近代ヨーロッパと人の移動：植民地・労働・家族・強制』第IV部「強制的な移動」山川出版社
- 児玉由佳編『アフリカ女性の国際移動』第4章「南アフリカにおけるコンゴ人女性による庇護申請と生活経験」、第5章「英国ロンドンにいるソマリ女性たちの生計活動」、第6章「サブサハラ・アフリカからフランスへの女性の移動と滞在資格：家族統合／非正規滞在／FGMを理由とする庇護申請を中心に」アジア経済研究所
- 小林真生編／駒井洋監修『移民・ディアスポラ研究9：変容する移民コミュニティ：時間・空間・階層』序章、第1章「日本におけるコミュニティとは」明石書店
- 末近浩太・遠藤貢編『グローバル関係学4：紛争が変える国家』岩波書店
- ストレルツォーバス、S./赤羽俊昭訳『第二次大戦下リトアニアの難民と杉原千畝：「命のヴィザ」の真相』明石書店
- 関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子編『オーストラリア多文化社会論：移民・難民・先住民族との共生をめざして』第II部「多文化社会オーストラリアと移民・難民」、終章 法律文化社
- 瀬戸裕之・河野泰之編『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略：避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』明石書店
- 芹田健太郎『犯人引渡と庇護権の展開（芹田健太郎著作集 第4巻）』信山社
- 芹田健太郎『欧米の揺籃期国際人権保障（芹田健太郎著作集 第5巻）』信山社
- 高宅茂『入管法概説』有斐閣
- 友原章典『移民の経済学：雇用、経済成長から治安まで、日本は変わるか』中公新書
- 鳥居一平『国家と移民：外国人労働者と日本の未来』集英社新書
- 名嶋義直・神田靖子編『右翼ポピュリズムに抗する市民性教育：ドイツの政治教育に学ぶ』第1部6章「移民・難民問題——連邦政治教育センターの資料を通して」、第2部3章「ドイツの移民・難民問題——「移民国」としてのメルケル政権の歩み」明石書店
- 永吉希久子『移民と日本社会：データで読み解く実態と将来像』中公新書
- 鳴子博子編『ジェンダー・暴力・権力：水平関係から水平・垂直関係へ』晃洋書房
- 錦田愛子編『政治主体としての移民／難民：人の移動が織り成す社会とシティズンシップ』明石書店
- 早尾貴紀『希望のディアスポラ：移民・難民をめぐる政治史』春秋社
- 片雪蘭『不確実な世界に生きる難民：北インド・ダラムサラにおけるチベット難民の仲間関係と生計戦略の民族誌』大阪大学出版会
- 福原宏幸・中村健吾・柳原剛司編『岐路に立つ欧州福祉レジーム：EUは市民の新たな連帯を築けるか?』第8章「難民受け入れにともなうスウェーデンの労働市場の変化と長期失業者への就労支援」、第9章「欧州シティズンシップの限界と可能性」、第10章「EUにおける移民・難民の地位保障」、第11章「変容するエージェンシーとシティズンシップ」ナカニシヤ出版
- 松尾昌樹・森千香子編『グローバル関係学6：移民現象の新展開』岩波書店
- 政所大輔『保護する責任：変容する主権と人道の国際規範』勁草書房
- 万城目正雄・川村千鶴子編『新しい多文化社会論：インタラクティブゼミナール：共に拓く共創・協働の時代』東海大学

出版部

村主道美『ロヒンギャの「物語」と日本政府』青山書店

森まり子『イスラエル政治研究序説：建国期の閣議議事録一九四八年』第2章「イスラエル国家の性格及び諸制度をめぐる論争とアラブ問題——一九四八年五月一六日～五月三〇日」、第3章「第一次停戦受諾とイスラエル国境・アラブ難民帰還問題をめぐる論議——一九四八年六月一日～六月一六日」人文書院

芳井研一『難民たちの日中戦争：戦火に奪われた日常』吉川弘文館

【論文】

阿部浩己「最新判例批評(6)難民に該当することを理由に難民不認定処分の取消判決が確定している外国人について法務大臣が再度不認定処分をする場合には、難民条約における終止条項に該当することを要するとした事例 [東京高裁平30.12.5判決] (判例評論735号)」『判例時報』2436号、132～136頁

阿部吉雄「上海の無国籍避難民指定地域への爆撃」『言語文化論究』44巻、75～84頁

青木恭子「第一次世界大戦期ロシア帝国における避難民」『富山大学人文学部紀要』73巻、41～65頁

飯笹佐代子「シドニー・ピエンナーレ2014と国外難民収容政策：アーティストの抗議活動は何をもたらしたのか」『青山総合文化政策学』11巻1号、35、37～57頁

市川顕「人の国際移動とポーランド：社会的危機を煽動する概念上の移民？」『上智ヨーロッパ研究』12号、77～98頁

伊藤頌文「欧州難民危機とキプロス：小国からみる難民受け入れの諸相」『国際情勢：紀要』90号、91～99頁

鶴川晃「難民の心理療法（特集：多文化共生社会における精神療法）」『精神療法』46巻2号、173～177頁

内田勝巳「難民に関するグローバル・コンパクト：アンケートから得られた難民問題に対する学生の意識」『摂南経済研究』10巻1・2号、53～71頁

大西楠テア「ドイツの難民受け入れ政策にみられる新たな傾向：難民の社会統合による『危機』の克服？」『上智ヨーロッパ研究』12号、37～45頁

岡奈津子「中国・新疆ウイグル自治区のカザフ人：不法入国とカザフスタン政府のジレンマ」『IDEスクエア：論考』1～14頁

呉泰成「日韓における難民申請者等への対応：法的地位と公的支援を中心に」『東アジア研究』73号、47～64頁

工藤正子「退去強制令をめぐるシティズンシップの交渉：1980年代英国における抗議運動からの試論」『現代社会研究科論集』14号、15～28頁

小野寺美奈・當銘美菜・前田君江・山西優二「難民絵本の特徴と教材としての可能性」『絵本学：絵本学会研究紀要』22号、13～24頁

小原啓吾・岡田智・景平義文・吉川剛史・Ozel Dilare「トルコにおけるシリア難民の子どもの現状と発達障害支援の課題」『子ども発達臨床研究』14巻、33～47頁

折戸勇太「ヨーロッパにおける亀裂：移民・難民問題で揺れるヨーロッパ」『商学研究論集』53巻、175～194頁

加藤雄大「難民の国際的地位と人格：戦間期における『住民incola』論の援用による対抗」『東北ローレビュー』7巻、189～213頁

河野正治「序（特集：歓迎の人類学）」『文化人類学』85巻1号、42～55頁

菅野賢治「『関門日日新聞』に見る戦時期日本へのユダヤ難民到来：一九三八年十一月～一九四〇年八月」『山口県地方史研究』124号、79～93頁

カンピラパーブ、S.・ウンゴーン、T.「タイ北部チェンライにおける外国籍・無国籍児童生徒の就学状況とその課題（特集：比較教育学におけるボーダースタディーズの可能性）」『比較教育学研究』60号、163～178頁

小磯京子・木下直彦・本間美知子・度會裕子・淡島正浩・瀧口徹「福島原発事故による県外避難者の重大ライフイベントが主観的ストレス度に及ぼした相加的影響」『日本放射線看護学会誌』8巻1号、11～21頁

小滝陽「対峙する人道と人権：欧州・キューバ難民への就労強制」『歴史評論』844号、41～53頁

佐藤以久子「判例紹介 ダブリン規則：第17条1項〔裁量条項〕の審査基準、英国のEU脱退に伴うEU法適用への効力：Case C-661/17, M.A., S.A., A.Z. v. Ireland, ECLI:EU:C:2019:53 (EU司法裁判所2019年1月23日先決裁定)」『国際学研究』10巻、15～23頁

佐藤滋之「『難民と移民のためのニューヨーク宣言』に見るレジーム接合と人権保障の可能性」『社会学論集』35巻、30～41頁

澤野由紀子・小川早百合「スウェーデンにおける難民・移民の子どもに対する言語教育の現状と課題」『聖心女子大学論

叢』136巻、138～182頁

柴田温比古「生まれと国籍：国籍の生得権をめぐる規範的検討」『相関社会科学』29巻、3～17頁

清水聡「ドイツ政治と「ドイツのための選択肢」：ドイツ連邦議会選挙（2017年）とポピュリズム」『玉川大学経営学部紀要』31号、33～48頁

昔農英明「EU・ドイツにおける難民・非正規移民の管理と市民・難民の抗議運動（特集：生体管理の現代史：市民・移民・植民地の統治技術：ドイツ現代史学会第四二回大会シンポジウム）」『ゲシヒテ』13号、65～75頁

竹沢尚一郎・伊東未来・大倉弘之「国内避難民としての福島原発事故避難者の精神的苦痛に関する研究：苦難の人類学へ」『西南学院大学国際文化論集』35巻1号、39～114頁

土田千愛「出入国管理に関する法案と論争（1969年から1973年）：「生権力」の視座で」『The Basis：武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』10号、247～262頁

土田千愛「難民条約加入前の難民保護に対する日本政府のアイディアの変容：難民保護に関する政治過程の分析より」『移民政策研究』12号、112～128頁

戸田五郎「『難民危機』へのEUの対応とダブリン・システム」『産大法学』53巻3・4号（今井薫教授・溝部英章教授定年御退職記念号）、689～724頁

中井遼「欧州におけるポスト難民危機期の排外意識分析：右翼政党支持・反移民態度・反欧州統合」『北九州市立大学国際論集』18号、43～72頁

中台恭江「高崎達之助と満州国避難民の抑留・留用、引揚」『東洋英和大学院紀要』16巻、25～42頁

中山大将「日ソ戦後の在南サハリン中華民国人の帰国：境界変動による樺太華僑の不本意な移動」『境界研究』10巻、45～69頁

新津久美子「難民移民の取扱いおよび収容：2015年以降の欧州と日本（シンポジウム・トランプ大統領と法の支配：トラベル・バンと差止命令を巡って）」『アメリカ法』2019巻2号、203～220頁

長谷部美佳「インドシナ難民の定住状況調査をめぐる一考察」『駒沢社会学研究』55号、25～49頁

羽生勇作「難民問題と安全保障：相関についての一考察」日本大学大学院総合社会情報研究科博士後期課程総合社会情報専攻（博士論文）

東村紀子「オランダ大統領政権下におけるフランスの移民政策とロマ系住民排除政策：『右』と『左』の政策的収斂」『研究論叢』95号、79～99頁

人見泰弘「テーマ別研究動向（難民研究〔国内〕）」『社会学評論』71巻3号、499～507頁

藤澤巖「海面上昇による気候変動避難民と国際法の対応（海洋国際協力とSDGsの実践）」『国際問題』693号、38～46頁

藤田恭子・佐藤雪野・大河原知樹「ドイツ・ハレ市における移民・難民の社会統合：フィールドワーク中間報告」『ドイツ研究』54号、65～72頁

古川千種「定住するミャンマー難民へのインタビュー：調査者である私と調査協力者である彼・彼女の変化（特集：インタビューのたのしさと、むずかしさ）」『語りの地平：ライフストーリー研究』5巻、197～203頁

ポダルコ、P.「世話好きな継母の日本：一〇〇年にわたる来日ロシア人の受容からみた日露交流の特徴」『拓殖大学国際日本文化研究』3巻、67～88頁

前田直子「難民認定事由としての宗教の自由に対する迫害：イラン人キリスト教改宗者に関する事例」『京女法学』17号、1～21頁

村川庸子「不測の米国市民権：入国禁止令と日系人強制収容のパラレルな関係（特集：世界の移民問題）」『敬愛大学国際研究』33号、19～42頁

森恭子「スウェーデン、ウプサラ市における社会統合に向けた取り組み：市役所、SFI、公立学校への聞き取り調査より」『人間科学研究』41巻、85～93頁

山崎暢子「ウガンダ北西部の国境地帯における紛争と移動：1970年代末から1980年代なかばの西ナイル準地域を対象として」『アジア・アフリカ地域研究』20巻1号、92～127頁

山田真弓「COVID-19危機と人道支援」『立命館国際研究』33巻1号、159～172頁

山野上麻衣「『子どもの貧困』からみる不就学外国籍の子ども不就学問題の20年をふりかえって」『グローバル・コンサーン』2号、86～103頁

山本響子「外国人の『人間の尊厳に値する最低生活保障を求める基本権』をめぐる現況と可能性：ドイツ連邦憲法裁判所2012年7月18日判決を中心に」『早稲田法学会誌』70巻2号、291～348頁

山本清治・甘利琢磨・Saraiji Nizar・松尾博哉「ヨルダン都市在住シリア難民障害者の居住環境とその社会参加制約の関連」『作業療法ジャーナル』54巻9号、1047～1053頁

山本清治・Saraiji Nizar・AbeerNayfehKurdi・Qasem Sarah・松尾博哉「シリア難民障害者Self-Help Group形成過程とその現状：リハビリテーション専門職と難民障害者との連携の可能性」『大阪作業療法ジャーナル』34巻1号、50～59頁

横井正信「難民問題とドイツキリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）における党首交代」『福井大学教育・人文社会系部門紀要』4巻、113～173頁

吉井千周「日本国憲法各草案における外国人の人権について」『多民族社会における宗教と文化：共同研究』23号、19～37頁

吉田邦彦「移民法の諸問題、基礎理論のディレンマ構造と市民権（公民権）の意義(1)：とくに民法（所有法）との関連で」『北大法学論集』71巻4号、43～80頁

吉満たか子「ドイツの移民・難民対象のオリエンテーションコースのカリキュラムと教科書に関する一考察」『広島外国語教育研究』23号、95～110頁

渡貫諒「無国籍難民認定の法理論：裁判例の分析と憲法理論への射程」『21世紀研究』11号、37～49頁

【お詫び】2020年3月6日発刊の『上智ヨーロッパ研究』12号（特集：欧州難民・移民危機の再検討）に掲載されていた複数の論文を誤って、『難民研究ジャーナル』10号「2019年難民関連文献一覧」に掲載していました。訂正して、お詫びいたします。『上智ヨーロッパ研究』12号に掲載された論文については、「2019年難民関連文献一覧」を参照してください。